

# 関寛齋 関連文書 (1)

須永 忠, 齋藤美栄子

関文書の会

**要旨:** 順天堂大学医学部医史学研究室が寄託を受けていた関寛齋家関連文書を解読したので5回に分けて記す。文久2年より明治5年までの文書139通で、その内111通(約80%)は戊辰戦争時、関寛齋が頭取を勤めた奥羽出張病院に関するもので、残りは徳島藩及び徳島県勤務に関するものである。その内容は北海道陸別町教育委員会発行『関寛齋 奥羽出張病院日記』を裏付けする文書類であり、又関寛齋経歴の日付けを確定する重要な資料である。

関寛齋は天保元年2月18日上総国山辺郡中村(千葉県東金市)の農民吉井佐兵衛の長男として生まれる。13歳の時寺子屋師匠関俊輔の養子となる。佐倉順天堂佐藤泰然・尚中に医学を学ぶ。この頃銚子の豪商濱口梧陵に認められ、資金援助を受けて万延元年長崎へ留学、ポンペに学ぶ。文久2年12月須田泰嶺の推挙により阿波徳島藩に出仕、戊辰戦争時に奥羽出張病院頭取として功績を挙げる。帰国後徳島藩医学校開設に尽力、病院長、医学校教授となる。明治3年10月13日より関寛齋の名を関寛に改名する。明治4年12月8日海軍省の指名により出仕するが翌年1月20日退職、そのご1年間山梨県立病院長を勤める。徳島に帰り医業を開業。明治35年4月14日徳島を出発し北海道に向かい妻愛子、4男又一と開拓に従事する。大正元年10月15日北海道斗満にて没。享年83。(1830-1912)

## 1 文久2年11月晦日 廣岡多門・集堂小平太より関寛齋宛 (関134)

(表書)

関寛齋様  
松平阿波守内  
廣岡多門  
集堂小平太

以手紙致啓上候、然は御達被申候儀御坐候間明朔日四時住居迄御出御座候様致し度、此段為可得御

意如此御坐候、以上

十一月晦日

猶以御十徳御用意可然は奉存候、此段も得御意候、以上

(注) 関寛齋は文久2年3月佐藤尚中たかなかと共に長崎留学を終え、上総国(千葉県)銚子にて医業を開業するが、佐倉順天堂で同門の徳島藩医須田泰嶺に口説かれ、25人扶持の士分として同年12月1日午前10時(4ッ時)徳島藩より呼び出され藩医となり須田泰嶺と交代した。

## 2 文久2年12月11日 蜂須賀隼人・長江播磨・蜂須賀伊豆より関寛齋宛 (関129)

(表書)

関寛齋殿  
蜂須賀隼人<sup>(1)</sup>  
長江播磨  
蜂須賀伊豆<sup>(1)</sup>

(表書)

其方儀被召出候御礼明十二日九時<sup>(2)</sup>罷出可被申上候、以上

十二月十一日

(1) 蜂須賀隼人・蜂須賀伊豆 阿波徳島藩主蜂須賀家第10代重喜の時に設立された分家。

(2) 九時 九ッ時. 昼12時.

(注) 関寛齋は12月9日江戸徳島藩邸にて藩主蜂須賀齊裕に拝謁した.

### 3 文久3年7月20日 伊東玄朴より井手三洋・関寛齋宛 (関1)

残暑強御座候処益御万祥奉賀候、然は須田泰嶺<sup>(1)</sup>より淡路守様<sup>(2)</sup>御丸薬差上候様御談ニ付、則前方調進仕候書付之通御上ケ可被下候、尤分量之多少はエキス類之乾キ塩梅にて精々強弱相違有之、糊之多少有之候間度々ニ軽重有之候間、其思召にて御割合ハ用可被下候、此段も一所ニ瓶ニ入レ差上申候、乍末御両殿様御機嫌御伺可被下候、此段奉願度如斯御座候、頓首謹言

七月廿日

伊東長春院<sup>(3)</sup>

井手三洋様

関寛齋様

御丸薬惣目方

正味 三拾弍銭<sup>(4)</sup> 右百五十包ニ分ケ、一日ニ三包ツ、 五十日ニ御上可被下候

(1) 須田泰嶺<sup>(たいれい)</sup>(経哲) 幕末明治の蘭方外科医。信濃国(長野県)伊那に生まれる。佐倉順天堂にて外科・産科を学ぶ。明治5年佐藤尚中の博愛舎創立に参加。明治41年没。享年84。(1825-1908)

(2) 淡路守<sup>(あわじのかみ)</sup> 第11代将軍徳川家斉<sup>(いえなり)</sup>の22男蜂須賀齊祐<sup>(なりひろ)</sup>。阿波徳島藩主。慶応4年1月6日没。享年48。(1821-1868)

(3) 伊東長春院 伊東玄朴。江戸末期の蘭方医。肥前国(佐賀県)に生まれる。シーボルトに師事し、江戸に出て開業。牛痘苗による天然痘治療に成功し、同志と共に種痘所を開設。蘭方医として初めて幕府の奥医師法印となる。しかし性格が災いして文久3年失脚。明治4年没。享年71。(1801-1871)

(4) 銭 薬種の重量の単位。1銭は約1匁。

(注) 本書簡に須田泰嶺の名があることから関寛齋出仕直後のものと思われる。この時伊東玄朴は奥医師を免ぜられ(文久3年1月25日)小普請医に降格している。

### 4 文久3年12月14日 蜂須賀伊豆より関寛齋宛 (関130)

其方儀先達て御医師被召出候所、此度生国上総山邊郡前ノ内村住実父関俊輔<sup>(1)</sup>え対面仕妻子召連爰許え引越申度、尤先年より下総海上郡銚子荒野村にて居屋敷相構医術修行仕居候ニ付、右為取得同所へも罷越度徠之、往來之分日数五十日斗前段当国へ之御暇、且嫡子生三儀、堀田鴻之丞殿<sup>(2)</sup>医師下総印旛郡佐倉住佐藤舜海方へ兼て医術為修行指遣有之ニ付、今5ヶ年斗其儘指置修行為仕度旨願之通被仰付候条可被得貴意候、以上

十二月十四日

(端裏書)

↙

関寛齋殿

蜂須賀伊豆

↘

(1) 関俊輔 関寛齋の養父。実父は吉井佐兵衛で、寛齋13歳の時関家(母幸子の姉とし子の嫁ぎ先)の養子となる。

(2) 堀田鴻之丞<sup>(ほったこうのじょう)</sup> 下総国(千葉県)佐倉藩主堀田正倫<sup>(まさとも)</sup>。

### 5 文久4年2月13日 蜂須賀隼人・長江播磨より関寛齋宛 (関77)

其方儀今度御国許迄立帰御供被召連候処、御用相済次第御指戻被仰付候条可被得其意候、以上

二月十三日

(端裏書)

↙

関寛齋殿

蜂須賀隼人

長江播磨

↘

### 6 元治元年2月20日<sup>(1)</sup> 島村鼎甫より徳島藩庁宛 (関132)

覚

関寛齋儀、旧冬往反之外五十日之御暇奉願、十二月廿六日爰許出立仕、同廿九日上総山辺郡前之内村関俊輔方え着仕、早速師家并親類共へも罷越、万端用向取片付可申答之処、其砌近在所々浪人

共<sup>(2)</sup>乱妨狼藉仕候ニ付、諸家様御人数出張ニ相成、口々御警衛厳重ニて往来出来兼候ニ付、無余儀去月中旬迄ハ何方えも得罷出不申、漸同廿五日佐倉并銚子えも罷越候次第ニて、未用意向も相整兼候処、尚又其砌より当年五歳ニ相成候小兒下痢症ニて散々相勝不申候ニ付、精々服薬養生為仕候得とも、兎角速々敷無御座、唯今之様子ニてハ急速快方之儀も無覚束奉存候、仍之追々御暇之日限も相立恐入奉存候得とも、何卒小兒少快迄之処、上総表出立之儀御猶予被仰付候様奉願度奉存候旨、留守受持私迄申越候間、此段私ヲ以奉願度奉存候、可然様御評儀被成可被下候、已上

二月廿日 島村鼎甫<sup>(3)</sup>

(付札)

覚書之趣承届候

- (1) 文久4年2月20日は改元により元治元年2月20日となる。
- (2) 文久3年12月4日千葉県九十九里浜地方にて蜂起した「世直し」攘夷派の集まり真忠組事件を指す。翌文久4年1月福島藩、佐倉藩等により鎮圧された。
- (3) 島村鼎甫<sup>ていぽ</sup> 幕末・明治期の医学者。天保元年備前国（岡山県）に生まれる。緒方洪庵に蘭学を、江戸に出て伊東玄朴に種痘を学ぶ。安政元年阿波徳島藩侍医、医学所教授、文部中教授を勤める。明治14年没。享年52。（1830-1881）。本書簡は島村鼎甫が江戸で医学所教授を勤めている頃のものである。

7 慶応元年10月10日 池田登・蜂須賀駿河・蜂須賀信濃より関寛齋宛 (関128)

(表書)

関寛齋殿 池田登  
蜂須賀駿河  
蜂須賀信濃

其方儀、尋姫様当冬中鷹司様え為御逗留御引移之節御供被仰付候、尤兼て被仰付置候御上坂御供は御免被仰付候条可被得其意候、以上

十月十日

(注) 慶応元年12月徳島藩主の養女尋姫は京都堂上公家鷹司家へ輿入れをする。

8 慶応3年12月18日 浜口儀兵衛（梧陵）より関寛齋宛 (関2)

一書拜呈仕候、敵猛之寒威ニ相成候所、御揃愈御清福被為入奉珍賀候、随て此元無異消日、幸御放念奉希候、拙生九月中銚子を発し暫在都霜月上旬発程、同下旬久々ニて無事帰村仕候、在関東中毎々御紙面被下留主宅えも不相変御音信被下御厚誼千万感謝申上候、昨年中愚書差上候後は無程帰村之上と不心御疎音ニ相成乍毎不信之至、無申訳怠慢之罪枉て御有怨奉希候、銚子表大宇岡源始旧相識皆々無事ニ有之、毎々御尊申上候事ニて御加筆之度々得と申聞候事ニ御坐候、彼等よりも御無音勝無申訳と被申居候

一、御事業追々御盛昌之御様子は毎々承聞、可賀可悦之限と被存候、猶御精励広済之御志業被為遂候様萬祈申上候、銚江之柳信生事業を随分被励候得共、何分書生習気脱し不申、齊家修身之一段ニ於て人望を失ヒ候杯承及候ニ付、折々は苦言も申入猶出立之節ハ説諭いたし置候、兎角小心強胆之度を取違修正之道ニ疎成は書生之常態ニ候得は、御文通之序御責被遣候方可然被存候

一、近来之世態誠ニ申様も無之朝勢草野之者は、尤可尽之道も無之、只々一身一家を守り候て洪恩ニ報し候より外有間敷被存、責て之事と郷里之世話ニ日を費居候、近日京攝之動静恐入候、事情如何、機関之變動有之事成と山中吾輩之小氏とも恐懼ニ不堪候

一、此程は留主宅え御音信被下兒輩え佳葉御惠贈、乍毎々難有奉謝候、舟幸便見当り候ニ付手製金山寺醬外一式品不腆之物呈上仕候、御叱留被下候ハ、幸榮ニ被存候、乍憚御家内様え宜御致意奉希候、久々ニて御窺申上度、余後音可申承被存候、時下御自護可被成御坐候、恐惶謹言

濱口儀兵衛<sup>(1)</sup>

関寛齋様 侍史

十二月十八日

(別筆 濱口梧陵翁書記)

(1) 浜口儀兵衛(梧陵) 幕末明治の醤油醸造家。紀伊国(和歌山県)有田郡広村に生まれる。種々の社会事業を手掛けたが、特に医学を厚く支援した。関寛齋はその一人である。津波から村人を救った「稲村の火」のモデルとしても知られる。明治18年4月21日ニューヨークにて病没。享年66。(1820-1885)

(注) 本書簡に「近日京撰之動静恐入候云々」、梧陵自身江戸へ出掛け状況視察をし、又は若者の軽拳妄動を戒めたり等々から、戊辰戦争前夜の慶応3年末の書簡と思われる。当時関寛齋は徳島藩医として危篤の藩主蜂須賀齊祐の治療に当たっていたが、慶応4年1月6日蜂須賀齊祐は死去した。

9 (文久3年より慶応4年迄) 月 日 関寛齋?  
より役所?宛 (関102)  
覚

私儀兼て御普請奉行御役所内え御指入被仰付罷在候、然ル処横手武藤左膳境板塀相損申候処境之義双方不罪ニ付何卒御見分之上急々御繕被仰付度奉存候、以上

月 日

(注) これより奥羽出張病院の記録となる。奥羽出張病院の記録に就いては北海道陸別町教育委員会が、平成28年3月1日に発行した『関寛齋 奥羽出張病院日記』がある。今回解読した書簡の内容は『奥羽出張病院日記』の裏付けとなる資料であることが判明した。依って『奥羽出張病院日記』(以後『日記』と略す)を参考にして注釈を加えた。

10 慶応4年6月8日 大総督府下参謀より関寛齋宛 (関9)

関寛齋

右御用之儀有之候間、唯今早々登城可有之者也  
六月八日 大総督府 下参謀

(注) この日参謀 渡邊清左衛門より奥羽出張病院頭取を云い渡される。関寛齋は上野彰義隊戦争時、大村益次郎にその負傷兵治療手腕を認められ、奥羽出張病院頭取に抜擢された。この奥羽出張病院は各藩の負傷兵を纏めた総督府直轄の野戦病院のはしりである。

11 慶応4年6月11日 有馬意運より関寛齋宛 (関74)

昨日之御尊翰相届早速拜見仕候、被仰聞候外療道具□□も弘底にて、彼是手を付候得共更ニ無之今朝ウレキス<sup>(1)</sup>方へ差越候処、今朝其表ニ差越□□御坐候、当病院も無之此内よりウレキス之道具にて療治方有之事ニ御坐候、邂逅御使者を御差立之事御坐候へ共、右之次第御座候間、左様御□□可被下候、近々之内ニ参候哉ニ承御坐候間、参り次第早速□□手を付置可申候、尤下参謀御方よりも別段御問合之義も有之申候間、右之段被仰上置可被下候、此外御雇も着之如是御坐候、頓首  
辰六月十一日 昼四字認 有馬意運<sup>(2)</sup>  
関寛齋様 台下  
尚々乍末筆奥羽御出陣勞敷御事、御切身之様專一奉禱候

(1) ウレキス ウィリアム・ウィリス。William Willis。横浜軍陣病院医師。文久2年5月1日来日。幕末から明治維新にかけて日本での医療活動に貢献したイギリス人医師。明治10年離日。(1837-1894)

(2) 有馬意運 薩摩藩医師。慶応4年横浜軍陣病院頭取を勤める。

12 慶応4年6月13日 新七より奥羽出張病院役人宛 (関10)

預り申金子一札ノ事  
一、金百五拾兩也<sup>(印)</sup>  
右は日本橋越前屋宗吉殿御出迄御預り申候処実正也、右御仁御出之節無相違御渡し可申候、為念置入一札如件

慶応四年辰六月十三日

品川宿式丁目 家主新七(印)

奥羽出張御病院 御役人中様  
 (裏書)  
 御請<sup>(印)</sup>  
 一、金百五拾兩  
 右は表書之通棹奉預候処実正ニ御座候、依之御  
 裏書奉差上候処、仍て如件  
 同月同断 品川宿問屋  
 役人 和助 (印)  
 上

(注) 関寛齋は6月14日品川より軍艦に乗り、  
 16日磐城国（現茨城県）平潟港に到着上陸、  
 戦火を交え、平潟港本町地福院海得寺に平潟  
 病院を設置した。後に平潟分院となる。

13 慶応4年6月 日 関寛齋 (関48)  
 (朱角印) [奥羽／出張／病院] 関寛齋  
 右当病院にて相用候間此段御断申上候、以上

14 慶応4年6月 日 奥羽出張病院会計方 (関106)  
 (朱角印) [奥羽出／張病院／会計所]  
 冲山武三  
 右当病院会計方にて相用候間此段御断申上候  
 以上

15 慶応4年6月17日 土屋善右衛門より関寛  
 齋宛 (関11)  
 拝呈、病人事万端御世話被成下奉拜謝候、酒肴乍  
 軽微御慰勞之為呈寸志候、御一笑被下候ハ、大慶  
 奉存候、勿々頓首  
 六月十七日  
 尚々薩藩御医師ニも宜敷御取成可被下候  
 関寛齋様 侍史 品添  
 大村藩 土屋善右衛門<sup>(1)</sup>

(1) 土屋善右衛門 肥前国（現長崎県）大村藩  
 士。戊辰戦争では藩兵の総指揮官として関  
 東・東北に転戦した。（1826-1898）

16 慶応4年6月21日 本川自哲・天野慎誠より  
 関寛齋宛 (関12)  
 貴墨拜見仕候、先刻ハ御見舞被下甚恐入事共ニ  
 奉存候、尔処唯今は存寄共御坐候結構之御品被  
 仰付難有頂戴仕候、何れ明日は参上万々御礼可  
 申上候得共、先一通勿々以上  
 六月廿一日  
 関先生 御答 本川自哲<sup>(1)</sup>  
 天野慎誠

(1) 本川自哲<sup>もとかわじてつ</sup> 肥前国大村藩医。7代藩主純富<sup>すみひさ</sup>  
 の頃番医格。安政6年江戸にて御産方を勤  
 める。

17 慶応4年6月21日 木藤甚七より関寛齋宛 (関14)  
 過刻は罷出御多用之処御面倒様ニ相成候段奉大謝  
 候、扱其節願置候御薬御遣し被下度奉願上候、猶  
 後便様体委しく可申上候、不備  
 六月廿一日  
 (端裏書)  
 病院にて 関寛齋様 机下 木藤甚七

18 慶応4年6月21日 櫻井領助・林庄次より関寛  
 齋宛 (関13)  
 快晴御同慶奉存候、然は小子共宿陣大坂屋傳兵衛  
 と申者之妻、久々眼病にて難儀いたし居候処先生  
 之御高名承り、得御療治申度段申出候、此節柄御  
 多用之御中え申上候も恐入候得共、何分大之風聞  
 故、御一覽之上御眼薬頂戴被仰付度奉願候、何も  
 取急早々申上候、以上  
 六月廿一日  
 関寛齋様 内用 櫻井領助<sup>(1)</sup>  
 林 庄次

(1) 櫻井領助 下総国佐倉藩士。平城の戦いで負傷し7月29日没する。享年20。

19 慶応4年6月22日 町田吉之進より関寛齋宛 (関15)

倍御堅勝之筈奉賀候、扱過日は参館蒙御懇命難有奉存候、爾後追々加養生居候処、夜前より従来之持病喘息少々差起り今難渋候間、まつ治喘之療養相加度御座候間御葉頂戴仕度、何卒此者え御渡被下度奉希望候、此旨乍失敬紙上ヲ以大略奉呈候、忽々頓首

六月廿二日

山岸 加賀屋

↙

病院にて

関寛齋君 病用御願 佐土原<sup>(1)</sup>町田吉之進

↙

(1) 佐土原藩 薩摩藩の支藩。日向国那珂郡、児湯郡(宮崎県宮崎市佐土原町)を支配。上野彰義隊や奥羽戦争に参加活躍した。

20 慶応4年6月24日 佐土原1番小隊より関寛齋宛 (関16)

谷山藤之丞<sup>(1)</sup>

三浦十郎<sup>(2)</sup>

右両人不快ニ付病院え入込保養仕度御座候間、宜敷御沙汰可被下候事

六月廿四日

佐土原 壹番小隊

(別紙)

右之通承届候間療養可被致候事

六月廿四日

奥羽総督府 参謀

病院御医師中

(1) 谷山藤之丞 日向国(宮崎県)佐土原藩士。7月2日戦死。享年31。

(2) 三浦十郎 明治期の官僚。弘化3年日向国佐土原藩士家に生まれる。明治3年藩命によりフランス・ドイツ留学。大蔵省紙幣寮に勤め調査局長。大正3年8月没。享年69。(1846-1914)

21 慶応4年6月29日 沼田又蔵より関寛齋宛 (関17)

昨夜参謀附属八幡権太夫為御使罷越御用済にて早刻罷歸申、其節同人申宣ニは昨日之戦争にて手負之兵士有之候ニ付、御医師ニも早々石塚村辺出張先え御出張御座候様可申達旨御参謀衆被申聞候趣、然ル処御出無之ニ付、御落着所相知候ハ、申通呉候様申置候、依之此段御達申上度勿々如此御座候、頓首

六月廿九日 弘曉認

(注)『日記』(22頁)によれば本書簡は総督府会計官附属沼田又蔵よりのものである。

22 慶応4年 月 日 関寛齋より道中諸隊宛 (関92)

覚

都田屋久助

右者当病院御入用晒木綿其外為御調上江戸表迄差遣候間無差支御通被成、且御用物等差送之節は人馬継立等之儀同人申出次第取斗可申候、以上

23 慶応4年7月7日 関寛齋より阿部節蔵宛 (関59-4)

泉住居<sup>(1)</sup>伊東文仲義嫡子事、当病院え入門仕度旨願出候、彼地之模様も相分り不申候ニ付、会計方阿部節蔵え左之通文通致し置き、同人より指支無之旨被申越候ニ付、指許シ候旨申聞置候、伊東文仲義下総佐倉本町出生にて、佐倉住佐藤舜海<sup>(2)</sup>門人にて私同門ニ御坐候、此段可然様御取計可被成候、以上

七月七日

関寛齋

会計 阿部節蔵殿

(1) 泉住居 磐城国(福島県)泉藩<sup>いづみ</sup>に住む。泉藩は奥羽列藩同盟に参加していた。

(2) 佐藤舜海 初代佐藤舜海(尚中)のこと。

(注) 関59は巻紙に5通の書簡を順不同に書き写したものである。これに枝番号を付し年代順に分解した。尚本書簡の文意を考えると宛先は阿部節蔵ではない。別の会計官であろう。

24 慶応4年7月8日 太政官会計官より関寛齋宛 (関18)

薩藩戦兵 町田養善院  
有村城之助家僕 次郎右衛門

右病氣ニ付、病院へ入院いたし度段申達ニ付此段相達候、以上

七月八日

↙

関寛齋老 太政官 会計官

↙

25 慶応4年7月9日 本川自哲・天野慎誠より関寛齋宛 (関19)

口上

奉拝呈候、益御安泰奉恐賀候、尔は頃日御病人毎々御厚配被成下、誠ニ以難有奉多謝候、甚申上兼候得共リンド<sup>(1)</sup>少々御願相叶間敷哉、此段御願申上候、先頃差上置候吸玉入用御座候間此者え御渡被下候様是又御願申上候、右一通如此ニ御座候、以上

七月九日

本川自哲

天野慎誠

関寛齋様

(1) リンド 亜麻の繊維で織った布をリンネルと云い、これを起毛加工した布で湿布や包帯に用いた。

26 慶応4年7月10日 岩田元昌より関寛齋宛 (関20)

覚

一、甘硝石精<sup>(1)</sup> 三、四匁

一、ヨジムホッタス<sup>(2)</sup> 五両<sup>(3)</sup>

一、龍腦<sup>(4)</sup> 壹両

右三品相成候得ハ借用度宜様奉希上候、以上

七月十日

岩田元昌<sup>(5)</sup> 花押

関寛齋様

(1) 甘硝石精<sup>かんしょうせきしょう</sup> 亜硝酸エチルエステル。発汗・利尿・鎮痙<sup>ちんけい</sup>剤に用いる。

(2) ヨジムホッタス iodim potassium. 沃剥。

沃ボツ沃化カリウム。鎮痛消毒剤。

(3) 兩 薬種の重量の単位。1兩は4匁。4匁4分や5匁のものもある。

(4) 龍腦 熱帯アジアに広く分布するフタバガキ科の常緑高木で龍腦樹の樹脂を加工したもの。頭痛、歯痛など鎮痛消毒剤。

(5) 岩田元昌 備前国（岡山県）池田藩医。明治3年創設の医学館（岡山医学専門学校）の生徒取締方を勤める。

27 慶応4年7月 日 某氏より関寛齋宛 (関109)

(前欠) 之内佐土原四人、備前御藩十四五人も可有之奉存候、亦々今日も平城攻ニ御座候間手負何程ニ相成可申哉も難斗候ニ付、何分御借用仕度奉存候、即死人も大分在之候様子ニ御座候、早々謹言

一、甘硝石水精 一瓶

一、竜腦 四匁

一、ヨシムホツタース 二十め

右は先日岩田元昌様御咄置候品之様子、今便御借用仕度奉存候

一、若浴衣御間似合ヒ相成居候ハ、少々にて御遣し可被下候

28 慶応4年7月12日 奥羽出張病院受取書 (関103)

一、金四両壹分ト銀壹匁貳分五厘

右は御薬種御調上ニ付江戸表にて御拂ニ相成候分

一、木綿縞 百反

一、晒木綿 貳百反

一、白砂糖 小壹樽

一、蠟燭 八箱

一、小田原提灯 五ツ

右は銚子にて御調上ニ相成候分

一、白砂糖 小壹樽

右は水戸にて御調上ニ相成候分

一、菓子 大貳箱

右は江戸表にて御調上ニ相成候分

一、綿入 百五十枚

右は相馬会計局より受取

一、蒲団 式十挺

右は平潟会計局より受取

一、金式百四拾壱兩三分一朱

右は安楽氏持帰り候御薬種料

一、大綿小紋共 六百七十一反

右は安楽氏より請取

(注) 7月13日第2次<sup>いゝきたいらじょう</sup>磐城平城攻防戦が始まり、同日深夜落城する。

### 29 慶応4年7月13日 佐土原藩戦争手負人

(関21)

一、左股打抜 大砲隊 凶師常造

一、右背打留 高橋軍右衛門

一、左手掌打抜大指迄打抜胸にて留ル

細山田藤蔵

一、左足薄手 小牟田武四郎

一、鼻高薄手 種田市郎

七月十三日 佐土原藩 戦争手負

### 30 慶応4年7月14日 磯谷小右衛門より関寛齋宛

(関87)

従湯長谷拜呈仕候、弥御安泰奉賀候、扱昨日は平城攻懸しニ相成候処、分曲迄にて本丸ハ落城不致誠残念之次第ニ御坐候、余程之怪我人にて尊君えは弥以御多用と奉存候、先日ハ段々御剂薬被送下千万難有奉存候、且又御委細御申越被下承知仕候、然処昨日之一条にて出張いたし候処、いつ方え紛込居候哉相分不申候間、今日分程御丸薬頂戴奉希候、何卒此者え直様御渡可被下候様奉願候、以上

七月十四日

尚々先頃申上候通にて外ニ何そ相替申儀も無御坐候、尤大便之通しあしく御座候間猶此段申上候、以上

(端裏書)

↙

磯谷小右衛門

平潟病院頭取 関寛齋様 御左右伺

↘

### 31 慶応四年 月 日 奥羽出張病院記録

(関108)

近藤類蔵<sup>(1)</sup>隊中

手負 横田豊之進

天野祐治隊中

手負 井上藤右衛門

天野祐治隊中

平病<sup>(2)</sup> 西垣峯三郎

(1) 近藤類蔵(孝敏) 砲隊長、磐城広野にて7月26日戦死。享年37。藩名不明。

(2) 平病<sup>へいびょう</sup> 病氣のこと。病人。

### 32 慶応4年7月15日 備州医官より奥羽出張病院宛

(関22)

七月十三日戦争之節手負疵所

一、左股 令官 浅野只治郎

但打留疵至て見え不申

一、股打抜 水谷伊孝太

一、右股打抜 岡本六蔵

一、左股打抜 野崎延右衛門

右之通ニ御座候間宜敷御頼申上候、以上

七月十五日 備州医官<sup>(1)</sup>

平潟出張 御病院

(1) 備州医官 備中国岡山藩医師。

### 33 慶応4年7月17日 鮫島彦齋より関寛齋宛

(関23)

御返翰被成下難有拜見仕候、時気無御痛被成御勤候之由、珍重奉存候、然は先程リンドウ<sup>(1)</sup>御願申上候処、此節因藩<sup>(2)</sup>出軍使より御送越被下、別て仕合ニ奉存候、尚得拜顔御礼可申上候得共其内以愚札御厚礼可奉謝候、以上

七月十七日

鮫島彦齋<sup>(3)</sup>

関寛齋様

(1) リンドウ リンネル製包帯のこと。

(2) 因藩<sup>いなぼ</sup> 因幡国(鳥取県)鳥取藩。

(3) 鮫島彦齋<sup>げんさい</sup> 薩摩藩医?。後に鹿児島医学校産科担当の医師兼教授を勤める。



34 慶応4年7月20日 野津七二・池上四郎左衛門より関寛齋宛 (関107)

未尊顔候得共弥御安固之由奉珍重候、然は此間より怪我人ニ就ては色々御世話被成下候由、至て奉厚謝申上候、今晚ハ早速押掛近頃恐入奉御坐候、此間より之手負人名前相書記し鳥渡為御知被下間敷や、尤当許ニ諸藩之名為御知被下は尚幸ニ思仕候、何分今晚夜中ニ乍御面<sup>(マツ)</sup>働為御知被下候、此段□□を以奉希上候、以上

廿日  
関探<sup>(マツ)</sup>齋様 薩州 野津七二  
其外々様 池上四郎左衛門  
御用

35 慶応4年7月21日 芸州藩より奥羽出張病院宛 (関25)  
覚

一、 影山佐平  
一、 山下浅助  
一、 檜垣助八  
一、 松村次郎平  
一、 中村證之助  
一、 此分重症 武信源助  
右は病者御坐候  
看病人 弐人  
八島周哲 上下弐人  
拾人

右之通り明後廿三日出船仕候様致度奉存候、以上  
七月廿一日 芸州藩<sup>(1)</sup>

(1) 芸州藩 安芸国（広島県）広島藩。

36 慶応4年7月21日 渡邊清左衛門より関寛齋宛 (関26)

其以後不得貴意候得共、愈御安泰可被成御勤奉大賀候、弊藩病人段々御面倒罷成忝奉存候、扱弊藩よりタンサンソータ、酒石酸一、二箱御相談申度申出候、便宜磐城え御送被下度、此段奉願候、頓首

七月廿一日  
〆

平潟病院 渡邊清左衛門<sup>(1)</sup>  
関寛齋様  
〆

(1) 渡邊清左衛門 肥前国大村藩士。奥羽追討総督参謀を勤める。後に渡邊清と改め、大蔵、内務官僚。明治37年没。男爵。享年70。(1835-1904)

37 慶応4年7月21日 福田純一・柴岡宗伯・石神良策より関寛齋宛 (関37)

花章被投辱拜誦仕候、秋涼相催候処、弥御強健被成御勤務拵喜之至奉存候、二ニ私共無恙相動居申候、乍憚御放意可被下候、然ハ今般は病人段々御贈方ニ相成、夫々承知仕候、将又副木之事被仰下、是迄□□え御申越之義も御坐候由、一向承り居不申候ニ付及延引申候、此度御門人中村澄齋君へ五品相渡申候間御落手可被下候、今般御同人御急ニ無御坐候ハ、差贈度品も御坐候得共、即今在合無之ニ付又々可差贈候、蒲団浴衣之事被仰下承知仕候得共、段々御相談仕候処、浴衣ハ被下切ニ不相成候ては如何哉由、当局会計頭取も沙汰御坐候、蒲団之義取調置便次第差立候間左様御承知可被下候、先は御答旁如此御坐候、恐惶謹言  
七月廿一日 頭取差添 福田純一  
〃 柴岡宗伯  
頭取 石神良策<sup>(1)</sup>

関寛齋様  
尚々時下折角御保護專一奉存候、備藩岩田元昌も御役付相成候由、猶此上御心添宜様奉頼候、以上

(1) 石神良策 文政4年薩摩国（鹿児島県）に生まれる。長崎にて医学を学ぶ。戊辰戦争時イギリス人ウィリスの下で治療に当たり、横浜軍陣病院の医師頭取となる。後ウィリスに従い鹿児島医学教授。海軍病院長。明治8年4月1日没。享年55。(1821-1875)。門人に高木兼寛がいる。尚本書簡は横浜軍陣病院より出信されたものである。

(注) 7月23日奥羽出張病院は平潟より小名浜

へ移動する。これは仮病院で立花見龍宅外旅宿10軒余に分宿する。

38 慶応4年7月23日 総督府使番より関寛齋宛 (関27)

御用之義有之候条唯今当局迄御出可有之候、以上  
七月廿三日

↙

若松屋鉄五郎ニて御使番

関寛齋様 大急ぎ

↘

(注) この当時奥羽鎮撫総督本部は三春にあり、三春へ出頭の命令である。

39 慶応4年7月24日 河田左久馬より関寛齋宛 (関28)

日々御配慮被成候御義と奉存候、扱昨夕より之戦争手負之者差贈<sup>(ママ)</sup>候間可然奉留候、尤内士官両三人ハ甚心促候者故、何卒格別御尽力奉万願候、幸ニ浅手故不日快方ニ趣可申と奉存候、右之段格別御頼旁如斯御坐候、以上

↙

七月廿四日 従久ノ濱<sup>(1)</sup>河田左久馬<sup>(2)</sup>

小名濱大病院

関寛齋様

↘

(1) 従久ノ浜 福島県いわき市久ノ浜より。

(2) 河田左久馬 佐久馬は通称。河田景与<sup>かわだかげとも</sup>。因幡国鳥取藩士。戊辰戦争では東山道総督府参謀、奥羽鎮撫総督府参謀として各地に転戦。明治維新後内務官僚として活躍。子爵。明治30年10月12日没。享年70。(1828-1897)

40 慶応4年7月24日 太政官会計方より関寛齋宛 (関29)

徴兵隊<sup>(1)</sup>之内四人不快ニ付其院え差送候間、養生之上全快次第出立為致可被申候事

七月廿四日 太政官会計方(印)

(1) 徴兵隊 各藩兵の外に新政府が徴集した兵隊。

[参考文献]

- 朝日新聞社編。朝日日本歴史人物事典。朝日新聞社：1994  
北海道陸別町関寛齋翁顕彰会編。関寛齋 奥羽出張病院日記。陸別町教育委員会：2016年3月1日発行。  
戸石四郎著。関寛齋 最後の蘭医。三省堂選書：1982年8月30日発行。  
合田一道著。評伝関寛齋。藤原書店：2020年6月10日発行。

(注) 関文書の会会員

酒井シヅ、岩崎鐵志、安倍晶子、川本いつ子、齋藤美栄子、齊藤陽子、佐藤ミホ子、神内國榮、須永 忠、増渕和代、林 績治、渡邊富士雄以上12名